

2025

8

令和7年8月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻384号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とあるお



公益財団法人
さわやか福祉財団



いきがい・助け合い オンラインフェスタ 2025

8月14日(木) お申し込み受付開始! (予定)

助け合いの基本や事例、課題への対応など、日頃の取り組みの参考としていただけるフェスタです。生活支援コーディネーター、協議体、自治体、住民主体の地域づくりに取り組んでいる皆様、学び合いの機会として、ぜひご参加ください!

開催期間：2025年10月14日(火)～10月23日(木)

開催方法：完全オンライン配信形式 (11月30日(日)までアーカイブ配信)

参加費：1000円(税込) ※後日、ダイジェスト版を希望者に郵送
参加費と同額を当財団の「地域助け合い基金」に拠出して、地域活動を応援します。

<お申込みウェブサイト> <https://festa.sawayakazaidan.or.jp>

プログラム

オープニングフォーラム

<進行役> 宮本太郎氏

<登壇者> 瀧靖之氏、秋山正子氏、稲葉ゆり子氏、菅野浩之氏

特別トーク

各分野を代表する方々の特別講演

学ぼう編 (8テーマ)

近隣助け合いの広げ方／小規模自治体で助け合いをどう広げるか／助け合いへの参加・創出に向けてのアプローチ手法／誰でも受け入れる居場所にするには／認知症の人と共に生きる地域づくり／子どもの育ちを地域で応援しよう／企業と連携した地域づくりの進め方／シニアの地域参加の広げ方

語ろう編 (3テーマ・ライブ配信)

生活支援コーディネーターと協議体による地域づくり 一悩みを出し合い、様々な解決方法を共有しよう／有償ボランティアによる生活支援(移送含む)の具体的な立ち上げノウハウ／助け合いの社会的価値とつながり方

お問い合わせ

さわやか福祉財団オンラインフェスタ担当
電話 03-5470-7751

当財団ホームページからもお申し込みいただけます。
右のコードもご利用ください。



とある

2025年8月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

ボランティアの参加は体験や声かけから 城石眞紀子さんへの心からの感謝とともに

清水 肇子

4 | 生き方 自分流 |

いつも全力で生きて 「やればできる」

砧むらおばちゃん会議 代表 大海 篤子さん（東京都世田谷区）

10 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

町全体がひとつになって活動創出 一緒に出かけよう！ 支え、支えられて元気に えべさの会（長野県小布施町）

20 シリーズ 定年、その先へ ー地域とのつながり方 4

定年前後期間でのキャリアチェンジの大きなプラス効果

一般社団法人定年後研究所所長 池口 武志

新しいふれあい社会づくりに向けて

16 「地域助け合い基金」

助成先のご紹介／状況のご報告

24 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

25 NEWS & にゅーす

27 活動日記（抄）

㊦ さわやか書棚

㊧ みんなの広場 / 投稿募集

㊨ さわやかパートナーのご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと・関 英佐子

城石眞紀子さんへの心からの感謝とともに

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

「助け合い活動への参加を呼びかけてもなかなか集まりません。どのようにしたらいいか悩んでいます。知ってもらうことが大事と1日居場所デビューを提案したところ、それでは効果が少なく、手間が多いと言われてしまいました」と、ある講演した先で声をかけられた。

今はネット上に様々な地域活動の情報が紹介されている。若い世代であれば、SNSを活用して楽しいと思う活動にどんどん参加を広めているし、当財団も含めて市民団体も行政も、助け合いに参加しませんかといういろいろな発信を重ねている。ただ確かに、地域活動への誘いはそう簡単に進むものではなく、多くの皆さんが課題を持って試行錯誤していることだろう。

人は自分が関心を持つていない対象には目が止まりづらい。目には映っていても認識しておらず記憶に残らないから、情報が届かないということになる。だから働きかける側は、まず関心を持ってもらうため、ハードルを下げて試行的な参加、ワークシヨップなどでの「体験」を呼びかけることは有効な取り組みだ。すぐに活動につながらなくても経験することが大事で意識が明確になる。居場所や有償ボランティアの助け合い活動でも、まずは1回、あるいは3か月など、回数や期間を決めてやってみようという進め方も以前より多く見聞きするようになって

た。学校や仕事以外に「地域」を体験する機会をどうつくるのか、これは実は孤立防止や介護離職防止にもつながることで、これから考えるべきますます重要なテーマといえるだろう。

では、地域活動を働きかける有効な方法は何かといえ、各種調査でも「きっかけは知り合いからの誘い」という割合は高く、団体で活動しているシニアの人たちに聞いてみても、「○さんに声をかけられて」という話をよく聞く。「それで人生が大きく変わりました」と。

城石真紀子さん。柔らかい人物取材から難しい社会テーマまで、本当に長きにわたり本誌にすばらしい原稿を提供してくれた。城石さんは、一昨年、突然病に倒れ、懸命に病気に向き合い頑張ったけれど、本当に悲しいことながら今年旅立たれた。ライターは裏方だから、と黒衣に徹していた城石さんだが、その思いをぜひここでお伝えさせていただければと思う。

彼女は著名な雑誌や本の編集者からよく声がかかる大変売れっ子のプロのライターで、福祉分野は、ご本人いわく「まったくの門外漢」。本誌とのきっかけは実は私で、ある大手企業の広報誌で私がインタビューを受ける側、彼女はそのライターだった。『さあ、言おう』を立ち上げたばかりの時期で、終了後に「よければボランティアですが手伝ってもらえませんか?」とダメ元で聞いてみたところ、「自分でできることなら」と応諾してくれた。以来、約30年、「ありがとうと言ってもらえて、自分の人生の栄養にもなって、様々な出会いに本当に感謝。こちらこそ誘ってくれてありがとう」と語ってくれた屈託のない笑顔が今も目に浮かぶ。

まさに本業を生かしたボランティアだが、「ボランティアだから、という言葉は自分は言いたくない。自分でやりたいと思って引き受けたものは、ボランティアでも本業でも何ら変わりません」と、さらっと言い切る彼女に取材者として人に向き合う矜持を見た。その素敵な生き様への心からの感謝とともに、残してくれた志をしっかりと受け継いでいきたい。

方・流 き・分 生・自

いつも全力で生きて 「やればできる」

砧むらおばちゃん会議 代表

大海 篤子さん（東京都世田谷区）

戦争開始の年に上海へ、小学生のときで近所で英語を学び遊んだ、その経験は大きな宝物だといえます。40代から大学・大学院にまで挑戦し、国際派として活躍、高齢者になってからは地域活動を開始。持ち前の冒険心と元気で前へ進み、たくさん仲間にもまれて軽やかに生きる大海さんに話を聞きました。

（取材・文／森 祐子）

東京都世田谷区砧きぬたの閑静な住宅街に佇む家。月2回、

この家から楽しそうな歌声が聞こえてくる。主催者は

「砧むらおばちゃん会議」（以下、おばちゃん会議）代

表で、この家を「くつろぎ処おおいさんち」（以下、

くつろぎ処）として地域に開いている大海篤子さん（84

歳）。大海さんのあいさつで会は始まり、その日のテ―





くつろぎ処には笑顔がいっぱい



くつろぎ処での大海さん（右）

マに沿って参加者が1人ずつ自分の経験や思いを語る。この日は取材に対応してくれたのか、「おぼちゃん会議に参加するようになったきっかけ」

がテーマ。「昨年まで働いていて、気づいたら地元が友だちがいなかった」「転居してきて、知り合いがいなくて孤独だった」「回覧板を見て気になって来てみた」など皆それぞれだが、どの人からも「この会に出会えてよかった」という喜びが伝わってきた。

ひとしきり発表が終わると、あとは席の近い人たちでお菓子をつまみながらのおしゃべりタイム。あちこちで笑い声が弾ける。最後に、キーボードの伴奏に合わせてみんなで手拍子しながら懐メロやフォークソングを歌い、2時間ほどの会はお開きとなった。

こういった何気ないふれあいこそが、地域には大事だと大海さんは思っている。この活動を出発点に、深刻な話を笑いながら議論する「終末期を考える人お一人様研究会V」や子ども食堂などにも活動を広げてきた。

ヨーロッパ人旅、結婚、海外生活

大海さんは3姉妹の長女として東京都

ロンドンの自宅で。
左から大海さん、
3人の息子さん、
夫の宏さん



品川区に生まれ、間もなく父親の仕事で中国・上海に渡った。「今思えば、幼少期に海外生活を経験したことで物おじしない性格になったかもしれないね」

2歳半のときに帰国したが、英語が堪能な家庭の友だちがいて、その家に遊びにいくうちに小学生で英語が話せるようになった。

短大の英文科で学んだ後はアメリカ系の会計事務所に就職したが、そこに外国為替の専門家としてよく訪れていた銀行員の男性が、のちに大海さんの夫となる10歳年上の宏さんだった。その頃、大海さんには「ヨーロッパを旅したい」という夢があった。仕事以

外にアルバイトもして目標金額を貯めたところで退職し、ついに一人旅を実現。22歳のときのことだ。ロンドンを皮切りに、2か月かけてフランス、スペイン、スイス、イタリアと、女性1人で海外旅行するのが珍しい時代に、行きたい場所を次々とまわった。

フルブライト奨学生としての米留留学やビジネスで海外経験が豊富だった宏さんは、旅行前にいろいろと相談に乗ってくれた。2人が交際することになったのは大海さんの帰国後。ぜひお礼と土産話を、と宏さんに会い、話が盛り上がって意気投合。間もなく結婚した。

もともと「おきやん」（お転婆）で、「結婚するなら歳がずっと上の人がいい」と母親に言われていた大海さんだが、結果的にその「予言」通りとなったのだ。その後数年間は3人の息子も生まれ、子育てに追われていた大海さんだったが、1971年、宏さんが海外へ転勤となり、オランダに2年、英国ロンドンに3年半という海外生活がスタートした。子育て中心ではあったが、宏さんの仕事の関係者が現地を訪れたときには、英語ができる大海さんはアテンド役として重宝された。



立教大学の卒業式で、母・満津子さん（左）と

「そういうことも含めて、非日常的で開放的な現地の生活はとても楽しかった」と振り返る。

一念発起、学問の道へ

帰国後、当時高校生だった長男がアトピー性皮膚炎だったことから、大海さんは生活クラブの活動に参加。合成洗剤ではなく石鹸を使うという生活クラブの「せっけん運動」で、志を同じくする区議会議員候補者の応援にも奔走した。そんなあるとき、区の職

員に「あなたたちは主婦だから、せっけん運動と食べ物のことばかり言う」と言われた。ばかにされたようで悔しかったが、宏さんからも「政治活動のサポートをするには、あなたの知識はまだ足りないのでは」というアドバイスを受け、一念発起。1989年に立教大学法学部に入学し、93年に卒業する頃には学問の楽しさに目覚



生活クラブの選挙活動で当選祝い（右から2人目が大海さん）

め、同大学政治学の修士課程に進学。「なぜ女性議員が少ないのか」をテーマに研究した。さらに95年にはお茶の水女子大学の博士課程に進み、ジェンダー研究センターで5年間ジェンダーと政治学の研究を重ね、2000年、59歳で博士号を取得した。悔しい思いをした日から12年の月日が経っていた。

「ヨーロッパの一人旅、海外生活、大学での研究を経験して、『やればできる』と確信するようになりました」と充実した表情で語ってくれた。

息子たちの独立、夫の認知症

博士号取得後は、ジェンダー研究者として非常勤講師や講演などで飛び回っていた大海さんだったが、2014年頃、当時83歳の宏さんに認知症の症状が出始めた。若い頃から留学や仕事で海外でも活躍し、大海さんの向学心を全面的に応援してくれた夫の発症。これから夫婦でどう生きていこうか……。ちょうどその頃、3人の息子も次々と独立し、自宅を広く感じるようになっっていた。

「自宅では何かできたら……と思いましたし、デイサービ

スに行く以外あまり活動しなくなった夫を見て、このままでいいのかな、という思いもありました」

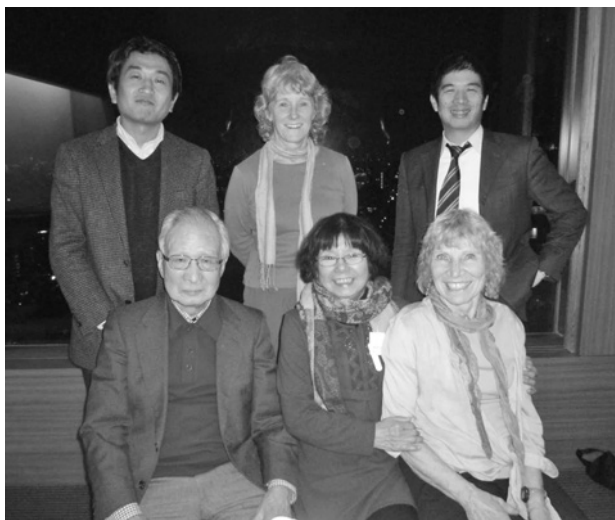
ヒントになったのは、自宅近くにある「笑恵館」の取り組みだった。笑恵館は、地域住民が交流できる拠点にしたいと、家主が自宅とアパートが建つ約100坪の敷地を開放し、世代を超えた地域の憩いの場となっている施設だ。

「自宅をこういう形で有効活用する方法もあるのか。



日米女性政治学者のシンポジウムでアメリカの若手政治学者と交流

宏さんが米国時代にホームステイした家庭とは、今でも家族ぐるみの付き合い



自分の家も、みんなが集まる楽しい居場所にしよう」

そう決めた大海さんは、ママ友や生活クラブで一緒だった仲間たちを誘って16年におばちゃん会議を立ち上げ、くつろぎ処をスタート。今では毎回20人前後のご近所さん

たちが集まり、語らい、笑い合う。

思っていた以上のふれあいも生まれた。

「くつろぎ処に来ている皆さんが、外で困っている夫に声をかけてくださったり、私に連絡をくださったりするようになって。顔見知りになることで皆さんが見守ってく

ださるようになったのは、本当にありがたいことでした」

いつも全力で生きて

くつろぎ処では笑顔で楽しそうだった宏さんは、18年に他界。その後もおばちゃん会議の活動は続き、地域活動や季節の話題を掲載して地域に配布している「砧むらだより」は今年100号を発行した。

「いつも全力で生きてきましたから、いつ死んでも悔いはないんですよ」と朗らかに笑う。

小学校の同窓会ではまとめ役だ。

「先日、80年来の友人たちと食事に行きました。この歳になってもみんなで会える幸せをかみしめています」と声を弾ませる。

「毎日話す相手がいて、毎週会う人もたまに会える人もある。そんなふうに人間関係の輪が三重くらいにできていれば、一人でも安心して暮らしていけますよね」行動的で快活なだけではない。楽しみながらまわりの人も自分も大切に生きていくことが、人に幸せをもたらすのだろう。

エ 広げよう つなげよう 地域助け合い

活動の現場から



町全体がひとつになって活動創出

一緒に出かけよう！ 支え、支えられて元気に

えべさの会（長野県小布施町）
おぶせまち

面積約19平方キロメートルに収まる長野県一小さなまち、小布施町。名産の栗と葛飾北斎が晩年通ったことで知られ、住民約1万1000人の地に年間100万人の観光客が訪れます。長野市から電車で約30分というアクセスの良さはあるものの、日常生活での身近な移動には課題がありました。その課題に取り組み、活動開始から1年が経った「えべさの会」取材しました。

（取材・文／石橋 千春）

ず同センター内にある町社会福祉協議会に寄って、運転前のアルコールチェックなどを行う。町社協管理の車のキーを受け取り、「えべさの会」と書かれたかわいいマグネットシートをボンネットにつけて、いざ出発。

「えべさ」とは「さあ、行こう」と呼びかける長野の方言。そのネーミング

にぴったりの活動現場に同行させてもらうことになった。午前中の買い物支

援だ。小布施町健康福祉センターで、えべさの会（以下、えべさ）の協力会

員である田近実子（73歳）さんと待ち合わせた。ドライバーは活動の前に必

一緒に出かけてお互い元気に

今回の利用会員は、町社協管理の「生活支援ハウスひまわり」に一人で

暮らしている田村福子さん（82歳）。昨年、町内の自宅を引き払い、同ハウスに越してきたばかりだ。福祉サービスを利用しているが、昨年9月にえべさにも入会した。

約束の時間にハウスの玄関で、田村さんとハウスの管理人・涌井和利さんが待っていた。田近さんがにこやかに「おはようございます。今日は手をつないで一緒に行くんですよ」と声をかけると、田村さんは「待ってました」とばかりに手をつないで車に移動。愛用の手押し車も一緒に乗せる。歩いてみると、途中で疲れて座り込むこともあるからだ。

同ハウスのもう一人の管理人・長田光男さんは、えべさの協力会員でもある。「環境の変化に不安を感じている田村さんにとって、住民の活動も選択肢に入ることは安心につながるだろう」と、えべさを紹介したという。



田村さん（左）と田近さん（右）が手をつないで銀行へ

最初に向かうのは銀行。田近さんも行内まで同伴し、必要書類の記入などを手伝う。2人は窓口の行員とも顔見知りなので手続きはスムーズに完了。次はお楽しみの買い物だ。近くにスーパーもあるが、田村さんは広すぎて苦手。以前の自宅近くにあるなじみのコ



介護福祉士だった田近さんはいつも朗らか。田村さんとの息もぴったりだ



銀行では「ここに名前を記入して…」と田近さんが田村さんの書類記入をサポート

ンビニまで行く。田村さんはパンの売り場でお気に入りの品をかごに入れていく。田近さんが「食事パンは？」とたずねると、「いや、今日は甘いのがいい」と、2人のいつもの会話が聞こえてくる。ひとしきり店内を見てまわった後は会計だが、高齢者にとってセ

ルフレジはサポートがないとなかなかハードルが高い。田近さんが小銭を出すのを手伝い、無事支払いを済ませた。ちょっと椅子に腰かけてひと休みしたとき、田村さんが「あのあたりが私の家だったの」と、遠くを指さしながらぼつりと教えてくれた。かつての自宅を懐かしむ気持ちが静かに伝わってきた。

ハウスに戻ると30分ほどが経っていた。田近さんが荷物を持って部屋の中まで送り届ける。キッチンで2人が膝を突き合わせて座り、荷ほどきしながらおしゃべりする姿は女子会のようにとても楽しそうだ。「時間が余ったときには、田村さんが以前住んでいたところまでドライブしたり、散歩することもあります」と田近さん。さらに「最近、お米が高いでしょ。生協を利用して田村さんが『このお米は安いよ』と私にもチラシを見せて教えて

くれたんです。でも、よくよく見ると玄米。田村さんは玄米を食べませんから、説明して無事白米を購入できました」というエピソードも教えてくれた。送迎だけでなく、こんなちょっとした会話から生まれる心の交流や安心こそが、えべさの魅力なのだと思います。

住民が本当に必要としているもの

小布施町内には鉄道の駅が2つ、病院や店舗なども一

通りそろっているが、約34%という高齢化率もあり住民からは、「運転免許を返納したら畑に行かれない」「買物の荷物が重くて大変」といった声が上がって



外出イベント「みんなでえべさ」。
活動者・利用者の距離が近くなり仲間意識が醸成される



えべさの会全体会の様子



いた。行政もこれまで町内巡回バスなどの実証実験を重ねたが、本格運用には至らなかった。

「住民の皆さんが本当に必要としているのは何なのか考えてみよう、ということになりました」と振り返るのは、町社協所属第1層生活支援コーディネーター（SC）の伊藤由花さん。2022年に

町が手上げた県のアドバイザー派遣事業を活用して、NPO法人全国移動サービスネットワークをアドバイザーに招き、SC、行政、地域包括支援センター、町社協などが集まって話し合いを重ねた。

小布施町第1層生活支援コーディネーター・伊藤由花さんの話

アドバイザー派遣

をきっかけに、目指すビジョンが明らかになったことで住民さんも含めた関係者がひとつのチームになれました。えべさの会は訪問型サービスBも活用していま



小布施町第1層生活支援コーディネーターの伊藤さん（左）と神田美沙さん（右）

すが、その要綱作成などは行政、利用者情報やケアマネさんとの協働は地域包括支援センター、車両や保険に関するサポートは町社協…といった横串の連携で住民さんを後方支援し、皆さんが活動しやすい環境を整備するのもSCの役割だと思っています。

活動を立ち上げるだけなら、SCがやるほうが早いかもしれません。でも、住民さんが自分事として取り組み継続していくには、やりがい・生きがいを感じられることが重要です。だから、議論に時間はかかってSCが簡単に答えを導き出すのではなく、皆さんに考えていただくことを大事にしてきました。

本格始動から1年経って、皆さんが自主的に楽しそうに活動されている姿は本当に頼もしいです。毎月の全体会にSCや包括も出席して、活動の方向がブレそうなときは初心を思い出しただけのように伴走しています。

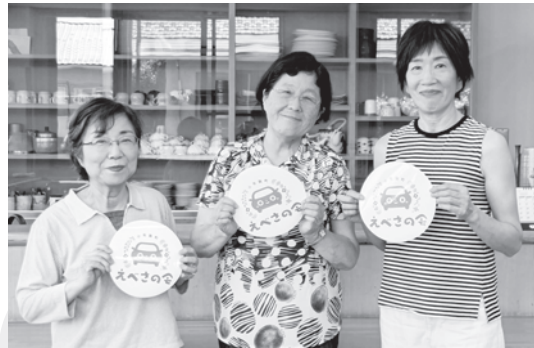
同年秋には、町の全戸にチラシを配布して住民フォーラムを2回開催。2回とも「住民主体の移動・外出支援」に関心のある住民20数人が集まった。翌23年には、その中から有志17人が集まって7回の勉強会と先行事例視察を

実施、5月に「えべさの会」を結成した。さらにそこから1年かけて、運営会議やテストイベントとして利用者を募り、ボランティアと共にシヨッピンゲモールに買い物に出かける「ちよつとえべさ」も実施した。

そして準備が整った24年7月、移動と、移動に伴う生活のお手伝いをする有償ボランティアグループ「えべさの会」は本格始動した。

活動は柔軟に

今年7月時点で、えべさの協力会員は21人（女性14人、男性7人）、年齢30～80代、ドライバー登録者18人（うち女性12人）。1か月に25件ほど利用がある。利用会員は42人で65歳以上の高齢者が中心だが、若い人でも必要なら支援する。会長の中西静子さん（73歳）は「対象者や利用目的を絞りすぎないようにしています。柔軟に対応していくのが当初からの想いでした」。副会長の眞田映子さん（61歳）も「ただ病院に行くとか、生活必需品を買いに行くだけでは寂しいですね。自分たちにできることなら何でもアリです」



左から鈴木さん、中西さん、眞田さん。
手に持っているのは、えべさの会のロゴマーク



えべさの会副会長の
矢島篤さん（右・70歳）と
小淵浩平さん（左・36歳）

と笑う。電話受付担当の鈴木眞知子さん（74歳）も「お互いに支え合うことで、利用会員も協力会員も元気になることを目指してきましたが、私自身、本当に元気になったんです」といきいきとした表情。以前は身体が弱かったが、今は風邪ひとつ引かなくなったというのだ。人生でのやりがいはいは人を健康に

「利用会員さんから支援依頼の電話が来ると、私がドライバー専用のLINEグループで活動内容を発信します。それに対応できる人の中から、依頼者との相性なども考慮してマッチング。誰も手を上げないときもありますが、再度発信すると、『あと30分遅ければ大丈夫』などと返事が返ってくる

してくれるものらしい。
ここで、えべさの特徴のひとつである女性ドライバーの多さについて聞いてみた。

「付き添いを通して、

皆さんの日常的な困り事を少しでも支えたいという想いを柱に据えてきたので、自然と女性が多くなったと思います」との答えに納得した。

るので、これまで依頼を断ったことは
ありません」と鈴木さん。

依頼した利用会員には事前に電話で
担当の協力会員を紹介。活動を終えた
協力会員は利用会員からチケット（事
前購入）を受け取り、LINEグルー
プで走行距離とともに活動報告をする。
活動で使用する車は、自家用車が町社
協管理の車のどちらかをドライバーが
決めているが、自家用車の場合は距離
分のガソリン代が加算され、活動協力
金とともに毎月まとめて協力会員に支
払われる。安心して活動できるよう、
えべさは複数の保険に加入し、年1回
はドライバーに運転研修を受けてもら
うことにしている。

えべさに入会を希望する人には、事
前に聞き取り担当の協力会員と包括の
保健師が訪問して面談。困り事の聞き
取りや家族の同意確認等を行い、「支
援希望内容確認チェックシート」に記

入。基本情報はドライバーに共有
される。

一緒に喜べる幸せ

運営メンバーの皆さんに印象に
残るエピソードを聞くと、利用会
員の30代男性の話をしてくれた。

「彼は遠くの介護施設に入所され
ているお母さんに、10日ごとに自
転車で隣の長野市まで洗濯物など
を届けていたんです。真冬や真夏
に『もう無理』となり、えべさを
利用するようになりました。車中
で私たち、おじさん・おばさん
とおしゃべりしたりして、心の窓
が少しずつ開いてきているように
感じます」とうれしそうだった。
彼の変化をみんなで喜べる。これ
も、支え支えられる活動の醍醐味
ではないだろうか。

外出・移動を日常の生活支援と捉え、外出時の付き添いの中で見えてくるちょっ
とした困り事を運転ボランティアがサポートする住民の支え合い活動。

<活動内容> 外出支援（買い物、通院、銀行、その他、目的を制限しない）、
ちょっとした困り事（電球、電池交換、簡単な日曜大工、外出の
ための玄関先の雪かき等）

<年会費> 1,000円（利用会員、協力会員共に）

<利用料金> 30分ごと300円（うち250円は協力会員へ、50円は会の運営
費）、チケット制で事前購入。1シート10枚綴り3,000円

<活動日・時間> 平日8:30～17:00（土日祝日休み）

※原則1週間前までに利用申し込み

●連絡先／026-242-6665（小布施町社会福祉協議会 伊藤・神田）

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、生活支援活動、外国人支援、引きこもりや不登校の理解啓発活動をご紹介します。なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

埼玉県吉川市

小さな困り事をお互い様の気持ちで支え合い助け合う

中曽根地域ささえあい会議

助成金額 15万円

埼玉県吉川市中曽根地区に住む高齢者一人ひとりが住み慣れた地域で自分らしく暮らせるように、住みやすい地域

づくりを目指して「中曽根地域ささえあい会議」は2019年に発足しました。22年に月2回のみんなの居場所「あじさい広場」をつくり、



ボッチャを楽しむ皆さんと、購入した道具類

翌年、小さな困り事をお互い様の気持ちで支え合い助け合う有償ボランティア「中曽根たすけあいの会」を立ち上げました。依頼は、庭木の伐採や草取り、エアコンフィルターの掃除などです。

今回の助成金では、「中曽根たすけあいの会」の活動充実のためのユニフォーム（Ｔシャツやジャンパー）をそろえ、庭木の作業等を使う道具を購入。作業中に通りがかりの住民から励ましの声をもらうなど晴れがましい気持ちにさせてもらえるそうです。また、居場所での活動を豊かにするためボッチャを購入、毎回30人以上が集まり楽しんでいるとのこと。

昨年から移動支援も始め、今年3月末までに44件の依頼があり、利用者からは「タクシーを頼んでも長時間待たされたので助かる」など喜びの声が寄せられています。今年4月からは、市が車を児童館に常駐できるようにしてくれたとのこと。住民の中に「向こう三軒両隣」の助け合いの精神が広まっていくことを願います、と報告をいただきました。



預かり保育の様子

親も子と共に自立し自分らしく生きていくための子育て支援、また、学習支援や多世代交流、地域との交流の場として「みんなの居場所」を開催するなど、スタッフやボランティアの年齢・性別もさまざまで、いきいきと活動しています。

三重県四日市市

外国人の親の日本語学習を 預かり保育で支援

NPO法人体験ひろば☆こどもスペース四日市

助成金額 15万円

「NPO法人体験ひろば☆こどもスペース四日市」は1992年に発足。子どもが子どもらしく生きられる社会、子どもが自分の力で人生を切り開く力があると信じ、遊びを中心とした体験活動、舞台や芸術に触れる文化芸術体験、

近年、四日市市の外国人集住地域では人口の18%程度が外国人ともいわれますが、乳幼児を育てている親は日本語を学習することが困難なため、同法人では支援の必要性を強く感じていました。そこで、親の日本語学習の間、未就園児を預かり親の日本語学習機会を確保すると同時に、地域とのつながりもつくつてもらうための活動を始めました。今回の助成金は、保育ボランティアへのオリエンテーションに必要な資料作成費、保育時のプレイマットやおもちゃ、子ども用机などの保育グッズ購入等に活用されました。これにより、子どもたちを預かることができたそうです。今後も、活動を通じて地域社会でお互いに育ち合う関係が期待されます。

京都府南丹市

引きこもりや不登校の人の支援と地域の理解を推進

みんなのTERAKOYAおおいがわ

助成金額 13万2000円

「みんなのTERAKOYAおおいがわ」は2021年、

ひきこもりや不登校の人とその家族同士が悩みを共有すること、また、日々の対応によるストレスの軽減などを目的に設立。さまざまな体験を通して成功体験を積み自分を認められるようになり、社会参加への一歩を踏み出すための支援を目指して仲間づくりを進めています。

引きこもりや不登校の人への理解はなかなか進まない一方で、その数は増加傾向にあります。当事者に少しずつでも地域に相談場所や寄り添ってもらえる場所があることを知ってもらい、地域住民にも理解してもらおうと、今回の助成金は仲間づくりのための音楽ライブや家族交流会、ワークショップのチラシ作成、交流会等



みんなのTERAKOYAおおいがわが開催した音楽ライブの様子

「地域助け合い基金」 状況のご報告

地域で困り事を抱え、孤立する人たちが全国で増え続けています。引き続き、本基金を通じて皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

◎ 助成実行額

1324件 2億149万8268円

◎ 寄付受付額

431件 2億907万7637円

このうち遺贈基金より1億7000万円を供出

(7月15日 当財団ホームページ開示時点)

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

基金に関するご意見・お問い合わせ

地域助け合い基金
担当

電話：(080) 9277-4174

FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

の飲み物・茶菓子代などに活用されました。これらの取り組みに参加した人からは、「話して気持ちが楽になった」という声も寄せられました。また、地域住民も「引きこもりの人の話を聞いてくれるところがあるよ」と紹介してく

れたり、チラシを置いてくれるようになってきたそうです。こうした取り組みによって、地域全体に活気が出て住みよい地域になることを願っています、と報告をいただきました。

定年、その先へ

地域とのつながり方

4

一般社団法人定年後研究所所長

池口 武志



定年前後期間でのキャリア チェンジの大きなプラス効果

（いけぐち たけし）1986年日本生命に入社。本部・現場で長く管理職を務め、多様な人材育成に関わる。2021年定年後研究所所長就任後は、シニア就労促進に関する企業取組、シニアの意識調査に従事。還暦で桜美林大学老年学修士課程を修了。厚生労働省生涯現役社会の実現に向けた検討会委員、企業から福祉への人材供給に関する調査研究事業検討委員、早稲田大学キャリア・リカレント・カレッジ講師、シニア社会学会理事等を通じて、シニアの可能性の拡がりを志向。

先月号で見たとおり、60歳定年制の会社で、60歳以降も同じ会社での継続勤務（再雇用）を選択した社員の割合は9割近くに達しており、定年の前後期間でキャリアチェンジを図る人は少数派と言えます。職業柄、筆者は50〜60代の会社員を対象にした「企業内キャリア研修」の講師を務める機会が多いのですが、現在の仕事を起点にした「65歳までの会社貢献を考えるワーク」では、参加者全員が嬉々として筆を走らせ、それぞれの考えを活発に披露しています。一方で、「会社卒業後の社会との関わりを

考えてもらうワーク」になると、多くの参加者の筆が止まり、視点が宙をさまよい始めるのです。

日頃考えたこともない、あるいは考えることを無意識に避けてきた「会社卒業後の」ライフやワークの理想像になると、限られた研修時間内で「答え」を見つけるのは至難の業と言えるでしょう。

筆者は3年前、58歳で入学した桜美林大学大学院老年学前期博士課程の修士論文で、「50〜60代会社員のキャリアチェンジのプロセス」大企業のホワ

イトカラー職種（管理職）を対象にして」（老年学雑誌第14号）」をテーマとして掲げ、終身雇用の会社を歩まれてきた10数名の男女にインタビューすることを試みました。そこでは、50代に入ってから役職定年、出向、早期退職勧奨など、会社員としての転機（ある意味では「外圧」）と遭遇し、これまで何の疑問も持たず続けてきた会社人生への迷いや不安を覚えることが移行プロセスの始まりになっていました。働く目的、仕事の意味合い、本来やりたいこと、家族からの期待など、さまざまなことが胸中を交差する中で、「会社以外の世界」への関心が徐々に高まり、これまでとは異なった人たちとの交流が視界を拡げていきます。いわく「全く違う世界の人と一緒に勉強した。ビジネスマンは自分だけだった」「出向してみても視界が広がった。社会のひずみにも関心が及ぶようになった」「時間の余裕ができたので、仕事の傍ら、いろんな会に顔を出すようになった」

やがて、彼ら彼女らは、移行プロセスの終盤を迎

え、「天職と出会ったり」「自らの強みに気付いて、社外でやっていく自信」や「新たなフィールドで必要とされる喜び」を感じるに至るのです。

10数名の以前の職業も、現在のお仕事も全くバラバラではありましたが、共通して伝わってきたのは、「元の勤務先で一生懸命に仕事をしてきた」「人と関わる仕事を通じて、コミュニケーション能力が高い」「社会貢献志向が高く、世の中に恩返しをしたがっている」「主體的な学びの意欲が高い」「好奇心や越境力が高い」などでありました。

また、海外や日本全国を相手にする仕事から、過疎地域の自治体での街おこしや、地元社会福祉協議会での社会的弱者の支援、高齢者就労支援窓口での就労指導、NPOでの外国人への生活支援など、地域色の強い仕事へのキャリアチェンジが大きな特徴でもあったのです。次号は、社会福祉の世界に飛び込んだ方の事例を紹介したいと思います。





うりずんの風に吹かれて

重い病気や障害、医療的ケアのある子どもとともに

高橋 昭彦

医療の進歩によって多くの小さな命が救われるようになり、医療的ケア児が増えている。

本書では、著者が自治医科大学を卒業後、訪問診療に取り組むようになったきっかけ、ボランティア活動、栃木県宇都宮市でのクリニック開業から人工呼吸器をつけている子どもの預かり事業立ち上げ、さらには行政に働きかけて利用者が使いやすい制度としたことなどが、やさしい文体で語られている。

書名にある「うりずん」とは、沖縄の言葉で春と夏の間の穏やかな季節を指す。滋賀県出身ながら三線が趣味という著者がこの言葉に出合い、事業所名にしたそう。子ども時代や、悲しみを伴う自身の親きょうだいの物語も盛り込まれており、引き込まれる。

重い病気や障害、医療的ケアのある子どもとともに



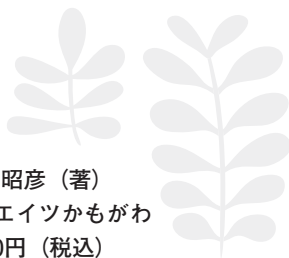
うりずんの
風に吹かれて

高橋 昭彦
Akikazu Takahashi



クリエイツかもがわ
CREATES KAMOGAWA

高橋 昭彦 (著)
クリエイツかもがわ
2,420円 (税込)



新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **NEWS & にゅーす**

- **さわやか活動日記（抄）**



ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2025年6月1日～6月30日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人(37件)

(都道府県別50音順)

岩手県	埼玉県
小野寺 明子	青木 武雄
小野寺 隆一	内村 実佳
川村 めぐみ	高橋 照夫
宮城県	永末 厚二
河村 憲二郎	東京都
秋田県	大井 利雄
三政 貴秀	尾崎 雄
茨城県	鹿野 哲
関 正樹	蒲田 尚史
丹 協子	佐々木 美智子
丹 文子	澁谷 勝彦
群馬県	名取 貞子
篠原 宏子	林原 満子
	保坂 雅宣
	山根 晃子
	神奈川県
	大坪 直子
	吉田 由依
	滋賀県
	梅沢 久子
	京都府
	嶋田 雅文
	松本 一芳
	大阪府
	荻原 久子
	中原 和之
	山浦 まき子

奈良県

平田 京子

広島県

黒木 詔子

林田 規子

深田 普佐次

徳島県

坂東 恵子

熊本県

木下 真理子

さわやかパートナー法人(7件)

(50音順)

NPO法人あすなろ友の会
株式会社公文教育研究会
株式会社シーエスエス
NPO法人たすけあいあさひ
NPO法人たすけあいほっとライフ小川
株式会社八洋
NPO法人ふれあい福祉の会山びこへるぷ

一般ご寄付(2件)

(50音順)

株式会社八洋 (50万円)
ボランティア・ベンダー協会
(43万6459円)

地域助け合い基金ご寄付(1件)

大坪 直子 (1万円)



NEWS & にゅーす



令和6年度（2024年度）

決算が承認されました

2024年度決算

期末指定正味財産

24億6174万6742円

期末一般正味財産

8億4139万8649円

6月4日に理事会、24日に評議員会
が、東京都千代田区にある丸の内中央

ビル内の会議室で開催されました。柱となる議案は、令和6年度事業報告並びに決算の承認です。理事会、評議員会とともに、まず清水肇子理事長が財団の活動全般について報告しました。

ふれあい推進事業では、6つのプロジェクトに取り組み、特に「地域共生推進・助け合い創出プロジェクト」と「地域づくり生活支援コーディネート・協議体支援プロジェクト」を連携させながら、全国への助け合いの地域づくりを強力に推進しました。2015年の改正介護保険法による新地域支援事業の開始から10年、住民が主体的に取り組みを進める動きが各地で見られています。一方で行政担当者や生活支援コーディネーターの異動等によりせっかくの動きが止まってしまう状況も課題として寄せられています。当財団では広く情報を収集・提供しながら、地域の課題に応じた支援や学び合いの

場づくりなどを進めており、秋に実施した「いきがい・助け合いサミット」の成果・反響等を報告し、本年10月も開催することの説明を行いました。

共生の助け合い活動を支援する「地域助け合い基金」では、令和6年度末時点で累計1265件、約1億9300万円の助成を実施。高齢者、子ども、生活困窮者など広がっており、その内容は当財団HPでご紹介しています。

また「ふれあいの居場所の推進」では、ごちゃまぜにつながる共生の居場所づくりの情報を積極的に収集し、実践に即した事例の発信に努めました。

「連合・愛のカンパ助成金」は18団体へ約270万円を助成。東日本大震災の復興支援では、岩手県釜石市の「平田どうもの会」に支援を行いました。

これらの事業は、協働パートナーである全国のさわやかインストラクター・助け合い推進パートナーの皆さんと連

携して実施しています。

社会参加推進事業では、4つのプロジェクトに取り組みました。シニアの社会参加推進を目的に、当財団が事務局を務める高齢社会NGO連携協議会（共同代表・清水理事長）として、初めて一般社団法人日本老年医学会と連携し日本老年医学会学術集会での合同シンポジウムを実施しました。

また、子どもの育成支援では、地域でどのように応援すればよいのかについて情報を収集し、各地の事例を情報誌で地道に紹介。さらに令和7年度からは、遺贈ご寄付を原資に、生活環境に恵まれない子どもたちへの支援を目的とする「子どもの未来応援プロジェクト」にも取り組んでいることを報告しました。

情報・調査事業では、3つのプロジェクトに取り組みました。情報誌『さあ、言おう』・情報紙『さあ、やろう』

では、引き続き全国の助け合い活動の事例や地域と共に暮らす生き方の記事等を紹介。HP等も活用した広報を行いました。また、国・自治体・関係団体が実施する研究会等を通じて住民主体の地域づくりへの提言を強力に行い、各団体の事例表彰選考にも積極的に関わっている状況を説明しました。

収益事業は、ご寄付をいただいた不動産の賃料等により安定的に収益が上がっており、財団事業・運営に大変役立つということが報告されました。

現場からの補足として、鶴山芳子常務理事から、行政との連携や各地の実践支援を進める一方、制度維持や継続の難しさも実感していること、今後は地域ネットワークづくりを強化し、住民の力を信じて助け合いの輪を広げたいとの報告がありました。

その後、事務局長・大石より決算の概況を報告。理事会・評議員会ともに

ご出席の理事、監事、評議員から多くの貴重なご意見をいただき、活発な質疑応答後、事業報告並びに決算報告は全会一致で原案通り承認されました。他の議案として、「理事の選任」、新公益法人制度改革に伴う「定款の変更」、「諸規則の改正」を諮り、いずれも原案どおり承認されました。

併せて、令和6年度に対応させていただいた遺贈ご寄付に関する報告も行いました。事業報告並びに決算報告は、本誌付録及び当財団ホームページで詳細をご覧いただけます。

（大石 敏晴）

役員就任のお知らせ

■理事 重任（6月24日付）

雨宮 孝子

公益財団法人公益法人協会理事長

さわやか活動日記(抄)

column

東京都立村山特別支援学校を視察 学校と地域がつながるには

共生社会推進リーダー 岡野 貴代

6月9日、東京都立村山特別支援学校(武蔵村山市)を視察した。同校は、当財団の今年度東京都教育委員会からの研修生・雛形亮我さんの原籍校でもある。今回の視察は、肢体不自由特別支援学校の小学部から高等部の子どもたち約110名の教育活動や日常の様子を見学し、学校と地域がどのように連携していけるかを考えることを目的とした。

現在、同校は新校舎の建設中で、視察したのは仮設校舎となった。新校舎完成予定地は視察に同行した武蔵村山市のSC2名が所属する南部地域包括支援センターに近接しており、SCとしても新校舎完成までに少しずつ連携を深めたいとの思いが強い。

朝の登校では、教職員が安全を最優先にスクールバスから子どもたちを迎える

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SCⅡ生活支援コーディネーター

様子を見ることができた。

その後、「学校と連携した地域交流」をテーマに学校の特別支援教育コーディネーターの先生や進路指導の先生と情報交換を行った。

小学部・中学部・高等部、自立活動室や保健室なども見学した。校内には子どもたちの成長や自立を支えるための設備や工夫が随所に施されており、看護師や自立活動担当教員、外部専門員など専門職による支援体制も充実していた。子どもたちが安心して学び、活動できる環境が整えられてい

ることに感銘を受けた。

また、小学部4年生と市立雷塚小学校4年生によるボッチャでの学校間交流の様子も見学。子ども同士が垣根なく互いに応援し合う姿がとても印象的であった。このような活動を通して、地域の中で子どもたちが自然に交わる貴重な機会となっていることが感じられた。

さらに、「地域との連携」についても意見交換を行った。SCからは、地域の自治会や老人クラブ、小学校との交流事例やサロンの情報に加え、企業から地域の

人々の交流の場としてギャラリ活用の申し出があったことも紹介され、今後は同校とも連携しながら新たな交流の形を模索していきたい、という前向きな提案がなされた。

阿部智子校長からは、「子どもたちは、いずれ地域で暮らしていきます。だからこそ、今から地域とのつながりを育んでいくことが大切だと考えています」との話があった。また、武蔵村山市では小学校との交流は継続しているものの、中学校以降はその関係が途切れてしまうことが多い現状を踏まえ、今後は中学生や高校生との交流も進めていくことで福祉への関心を持っつきっかけになり、子ど

もたちが大人になってからも地域とのつながりを保てるのではないか、との考えも示された。

こうした思いのもと、学校は今後も子どもたちと地域住民との交流の場を丁寧

に育てていこうとしている。地域の多様な人々が学校と関わることで、地域共生社会の基盤づくりとなるのではないだろうか。

今回の視察を通して、障がいのある子どもたちの学びや生活の場も、地域と地続きであることをあらためて実感した。障がいがあるひとりの個性として受け止めることが当たり前の社会となることを願う。

各地・各事業の取り組みをご紹介します



ふれあい推進事業

情報交換会開催

SC・協議体の役割、
つながり・助け合いについて講義

■ 神奈川県

〔6月17日〕神奈川県主催

の情報交換会に当財団の鶴山が講師として協力。財団の丹直秀理事とさわやかインストラクターの島津禮子氏もアドバイザーとして協力した。参加者は県内のSCや行政職員等約20名で、約半数が生活支援体制整備事業を担当して1年未満の人たちだった。

行政からの事業取り組み状況の報告等につき、「生活支援コーディネーターと

協議体に期待される機能・役割」として鶴山が講義。

初任者向けに基本を押さえ、また、事前アンケートを踏まえてSCと協議体に期待される機能と役割について事例を交えながら説明した。制度改正については、制度を地域でどう生かしていくのか、地域をよく見て、住民の声を聞いていくことの重要性やサービスの推進と併せて大切なつながりや助け合う関係の推進について



神奈川県主催の情報交換会の様子

伝えた。

事例報告は、(1)同県川崎市から「地区カルテの利活用について」、(2)同県座間市から第2層SCの取組について。どちらもたくさん質問が上がり、良い情報提供になったようだった。

その後、グループ別情報交換と発表、意見交換を实

施。グループワークは、行政担当者、第1層SC、第2層SC、第1層・第2層兼務SC、の4グループに分かれ、県が選んだいくつかのテーマから話したいテーマを選び60分ほど活発な議論を行った。グループごとに発表した後、丹理事と島津氏にまとめのコメントをもらい、鶴山からもコメントして終了した。

終了後アンケートには、「他市の取り組みを生で聴くことができた。地区カルテ等アイデアをもらうことができた」「長くSCを続けている方、さまざまな地域特性がある中、活動の仕方についてアドバイスをいただけて、どれも参考になった」「時間がかかること、

どういう地域にしたいのかを皆さんとも話したい」

など前向きな感想が見られた。
(鶴山 芳子)

SC養成・スキルアップ研修会開催 住民への働きかけ方など グループワークで学び合い

■ 山梨県

〔6月18日〕山梨県で「令和7年度生活支援コーディネート研修会（基礎編）」が開催された。対象は、県内自治体で生活支援体制整備事業に関わって間もない、あるいは学び直したいSC・行政の担当職員・社会福祉協議会職員・その他受講を希望する人など。各市町村やSCがそれぞれの地域の実情を踏まえ、同事業を効果的に進めていくために必

要な視点、知識、技術を学ぶことを目的とし、参加者約40名のうち半数ほどが今年度から担当になったSCや行政職員だった。同県のさわやかインストラクター石井満代氏、塚田好子氏、長谷川すみ江氏も参加し共に学び合った。

県からのあいさつと行政説明に続き、当財団・鶴山より「生活支援コーディネーターの役割・住民への働きかけ方」と題して講義を



山梨県の生活支援コーディネーター養成・スキルアップ研修会（基礎編）の様子

行った。事業開始から10年、人口減少の影響や制度改正もあり、多様な主体による

サービスが進められている。また、地域でのつながりや家族機能低下は全国各地でも顕著となり、サービスづくりに加えて、つながりや助け合う関係の再構築、「誰かの役に立ちたい」気持ちを生かせる仕組みも大切。10年で分かったこととして「住民が主体的に取り組む地域づくりは、時間がかかるが根付き広がっていく。さまざまな効果を生み、今後ますます重要」と伝えた。この研修会では事前アンケートを取っており、その質問に答える形でさまざまな事例を入れながら講義を行った。

事例は同県昭和町と市川三郷町から発表された。「住民へのはたらきかけ」

をテーマに具体的な取り組みを紹介するとても良い事例だった。実践から生まれるさまざまなポイントもあり、例えば「対話の場をつくる」「二方向的に決めない」など第2層協議体を一緒に考え進めていくプロセスの大切さなども伝えられた。グループワークは、7テーマから各グループで2つ選んで議論してもらった。発表でいろいろな課題やそ

の解決方法を共有した。最も人気の高かったテーマは「住民への働きかけ（自分事として考えてもらうにはどうすればよいか）」で、多様な方法が共有される機会になったと思う。鶴山から「地域に戻ったら、1つでもいいので今日のノウハウを実行してみると、また次が見えてくる。まずはやってみましょう」とまとめた。（鶴山 芳子）

「楽しく知ろう！始めよう！地域のささえあい」 市民フォーラム開催

■長与町（長崎県）

【6月19日】長崎県長与町は、第2層協議体をコミュニケーション単位で5圏域立ち上げる予定であり、現在2圏

域（高田地区、北部地区）で立ち上がり活動中。また、上長与地区は検討が進み始めている状況である。



その中で、これから立ち上げていく中央地区、南地区の住民をメイン対象に「町の現状をお伝えし、支えあいの地域づくりを「我が事」として認識していただくこと、そして今後地域づくりや第2層立ち上げへの理解・協力を得ることを目的に」と、「地域支

え合いフォーラム 楽しく知ろう！始めよう！地域のささえあい」が開催された。50名程度という予想を大きく上回る90名ほどの住民が参加し、会場はいっぱいになった。すでに協議体が活動している地域からの参加もあった。

行政のあいさつと説



長与町で開催された市民フォーラムの様子

明の後、当財団・鶴山より「支えあいある地域をみんなでつくろう！」と題して講演。協議体について各地の事例を紹介しながら活動をイメージしてもらおうと、参加者の目がいきいきとして聞き入る様子が見られた。「助け合い体験ゲーム」も

実施したところ、各テーブルから笑い声上がるなど大変盛り上がった。質疑応答も活発で、財団だけでなく町への質問は担当課長が的確に回答した。

今回の市民フォーラム開催のきっかけは、県のアドバイザー派遣を活用した同県西海市の勉強会への長与町SCや行政担当者のアドバイザー参加である。それによって、住民にどのような働きかけ進めていけばいいのかを学んだ、というこ

とだった。テーマにある通り「楽しさを伝えたい」と企画、財団とも打ち合わせを重ねて「体験ゲーム」を入れるなど工夫した。

アンケートによると参加者の約8割が「地域の支え合いに関心を持つことができた」と回答。7月下旬から希望者をメインに「語ろう会」を開催しながら、第2層協議体の体制づくりを進めていく予定。

(鶴山 芳子)

生活支援体制整備事業基礎研修 事例学び、グループワークで事業推進考える

■大阪府

〔6月20日〕大阪府で、生活支援体制整備事業の関係

者すべてを対象に、生活支援体制整備事業基礎研修が

行われ、74名が参加した。

目的は、同事業の基本的理解、行政職員とSCの役割、地域への関わり方、市町村の活動事例を学び今後の事業推進に生かすこと。

まず府から現状の報告。次に当財団より、事業の基礎と2024年度の改正について講義。財団の助け合い推進パートナーである同府太子町社協の貝長登之氏から、「事業の実施について 基礎の『キ』」と題し、事業理解から必要なものを考える太子町の取り組み事例を基に講義を行った。

グループワークは、経験年数が浅い参加者が多かったため、原点に帰り地域ニーズを把握して助け合い活動につなげるために、パラ

ダイムシフト（既成概念や固定観念、ものの考え方や価値観が変わること）について考える内容で行った。行政・地域包括支援センター・SCがごちゃまぜにな

ったグループで、経験年数の長い参加者がファシリテーターを担当。(1)身近な私のプチパラダイムシフト、(2)身近な地域のプチパラダイムシフト、(3)中間発表、(4)今後考えられる身近な地域のプチパラダイムシフト、(5)それって地域の「ニーズ」では？、(6)地域ニーズをどこに、誰に、どんなふうにつなぐか意見交換し、解決策も考えてみる、の6つで、最後にグループごとに解決策や気づきを発表した。

貝長氏からは「今までの取り組みを調べてみる。できていたか、できていなかったか。何をしようとしていたのか、何をすべきであったかを一度考え、これから話し合ってみましょう」と、事業を進めるために大切な視点を話してもらった。



情報・調査事業

厚労省 令和7年度地域づくり加速化事業 第1回運営委員会に出席

【6月17日】令和7年度地域づくり加速化事業の第1回運営委員会が開催され、委員として出席した。冒頭に厚生労働省認知症施策・地域介護推進課長の吉田慎

最後に財団から、「今日行ったグループワークは、地域で話し合いを進めるための協議体の機能と同じ。地域のいろいろな情報をどんな場で、誰と話していくのか、自分の市町村に置き換えて考えてほしい」と伝えた。

(目崎 智恵子)

氏があいさつ。2040年を見据えたサービス提供体制の検討会の中とりまとめに触れながら、第9期介護保険事業計画後を見据え、今年度は地域レベルの取り

「エイジフレンドリーな地域共生社会に向けて」 日本老年学会総会で合同シンポジウムを開催 ー高連協ー

当財団が事務局を務める高齢社会NGO連携協議会（高連協）が6月27日、千葉市の幕張メッセで開催された「第34回日本老年学会総会」において、日本老年学会との共催で合同シンポジウム「エイジフレンドリーな地域共生社会に向けて」を行った。同時時間帯に多くの別プログラムが行われていたが、この会場もほぼ満席となり、高い関心が寄せられた。後日、アーカイブ配信も実施された。

シンポジウムは、年齢にかかわらず誰もが自分を生かして幸福になれる社会がこれからの超高齢社会であり、健康長寿の延伸はもとより、自身が持つ能力を社会に生かすという意識への転換と、そうした多様な社会参加を支える具体的な枠組みづくりを提言した。

座長は、当財団理事長で高連協共同代表の清水肇子と日本老年学会副理事長の福富昌城氏。冒頭、清水座長が「高齢になっても、障がいがあっても、誰もが多彩な能力を生かして、いきいき

と暮らせるエイジフレンドリーな社会の構築が求められている。非営利の社会活動を実践している団体のネットワークである高連協と、7つの学会が集う日本老年学会総会が合同でシンポジウムを開催すること自体に意義がある」とシンポジウムの趣旨を述べた。

続いて、駒村康平氏（ファイナンシャル・ジェロントロジー研究センター長・慶應義塾大学経済学部教授）が「超高齢社会をいかに乗り切るか～高齢社会対策大綱を踏まえた提言～」と題して基調講演した。また、荒井秀典氏（日本老年学会理事長）は「日本老年学会としての役割と今後の活動方針について」、清水理事長からも改めて「住民・市民が主体的に参加する地域づくりとは」を講演。さらに、杉啓以子氏（高連協理事・NPO法人日本世代間交流協会会長）は「多世代・多文化交流がめざすもの～世代を超えた交流が超高齢化社会の未来をつくる～」、狩野光伸氏（岡山大学副学長）は「SDGsからみた高齢社会～SDGs達成に向けた大学の実践の取り組み～」と題してそれぞれ講演した。

福富座長は最後に「本シンポジウムはまさに多世代と共有すべきであり、若い世代や中年世代へのアプローチが必要」とまとめた。

日本老年学会との新たな連携は、高連協関係団体・当財団にも大変有意義なことであり、さらなる社会参加推進につなげていく。

（玉置 英明）



日本老年学会総会における合同シンポジウムの様子。清水理事長は座長を務め、演者として講演も行った

組みを一層推進する観点から「厚生局主導型」に加え「都道府県主導型」を創設し、より強化していくことなどについて話があった。

新たな委員も加わる中、今年度も大坂純氏（東北子ども福祉専門学院副院長）が委員長として進行し、田中明美副委員長（生駒市特命監）をはじめとする委員が和やかながらも活発に議論した。

議題は大きく2つ。(1)地域づくり加速化事業について、(2)支援先市町村選定及び担当アドバイザーについて。

(1)では、例えば「スキルアップ研修会」「支援者間ミーティング」などさまざまな研修等を行っているが、

昨年度までの取り組みを受けて、より良い内容にするための議論を行った。加速化事業では昨年度から伴走的支援の市町村評価を始めており、今年度もより積極的に進めていくこととしている。財団からは「地域づくりは『継続』していくことが大切であり、そのための中長期による支援と評価も大切ではないか。1年目の支援をきつかけに、2年目以降どのように地域に働きかけ、どのよう

株式会社八洋様、ボランティア・ベンダー協会様が寄付金贈呈のため来訪されました

6月20日、株式会社八洋の代表取締役社長・後藤晃宏様、同社営業部長・柴田恭伸様、ボランティア・ベンダー協会事務局長・井上卓朗様が、2024年度下期（2024年10月1日～2025年3月31日）分のご寄付贈呈のため当財団をご訪問くださいました。

八洋様は、飲料1本の購入により3円が寄付されるボランティア・ベンダーの仕組みを提唱し、1994年のボランティア・ベンダー協会創設時より31年にわたって協会普及・団体運営に尽力されています。現在、ボランティア・ベンダー自販機は全国で1310台設置されており、これまで累計1億9600万円以上の寄付金がSDGsに沿った40団体へ贈呈されています。当財団に



寄付金贈呈式での
後藤社長（左）と清水理事長（右）

も、活動理念に賛同いただいた51設置事業者59台の自販機によるご寄付をいただいています。今回は43万6459円を頂戴し、これまでの累計が3000万円に迫る金額となりました。

さらにこの日、八洋様からもご寄付50万円を頂戴いたしました。

長年のご支援にあらためて心から御礼申し上げますとともに、ご寄付を「新しいふれあい社会の実現」のために有効に活用してまいります。（玉置 英明）

な反応が地域から感じられるか、より地域に落とし込んでいく視点も重要ではないか」などの提言をした。

今年度はさまざまな課題を抱えた全国22地域（うち4地域は都道府県主導型）において、支援チームによる伴走的支援がスタートする。

（鶴山 芳子）

事務局

東京都立水元小合学園 より現場実習受け入れ

〔6月9～13日・16～20日〕

東京都立水元小合学園高等部2年生の生徒2名がそれぞれ5日間、当財団で現場実習を行った。

事務作業全般の現場実習は初めての2人、不慣れな

環境の中、はじめは緊張や不安もあったと思うが、時間が経つにつれて緊張もほぐれて作業をしていた。始める前にはその作業内容のポイントや注意点などをメモに取り、分からないことや苦手なことはそのままにせず積極的に確認しながら事務補助作業全般、パソコンでの書類作成など、どの作業内容も一つ一つ丁寧に確実に進めてくれた。

事務所 より

●今年度の地域支援事業も各地で動き出し、近畿ブロックのサポートを担当している研修生のHさんも初の現地支援へ。東京と違い、エスカレーターで立ち止まる人が右側に並んで乗っていたり、京都府宇治市では宇治茶の力フェがたくさんあったりと、ちょっとした発見があったそう。助け合い活動にも地域性があるから、これからの支援でそういうことも実感できるといいね。

最終日、報告会での発表の実習では、財団職員に実習内容を分かりやすく報告し、その場を和ませるような一面も見られた。昼休みなどにも職員とコミュニケーションを取りながら、5日間有意義に過ごしてくれたことがうかがえて、良い形で修了できたと思う。

（齋藤 裕子）

みんなで
新しいふれあい社会を
つくりませんか



感謝の 気持ちを込めて 思恩忌 夏



株式会社ベネッセホールディングス名誉顧問の福武総一郎様より
お花を頂戴しました

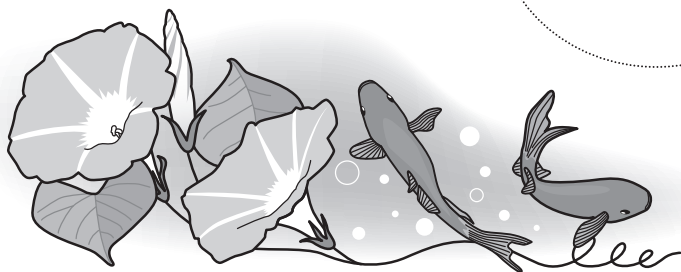
東京のお盆に近い7月16～18日の3日間、当財団の事業にご貢献をいただきました皆様、また、ご遺贈をお寄せくださいました皆様に感謝し、そのご遺志を再確認する「思恩忌 夏」を執り行いました。

当財団創設者で永世名誉パートナーの故堀田力さん、初代会長の故石川忠雄さんのお写真も飾り、花をお供えして、清水肇子理事長と財団職員一同で、故人の皆様への感謝の気持ちを込めてご冥福をお祈りしました。

＜ご遺影を飾らせていただいた遺贈者の皆様＞

故山路鈴子さん、故沢村貞子さん、故小村忠男さん、故関美江さん、故松岡廣子さん、故石河刃雄さん、故石河豊さん、故大友恭子さん、故齋藤規子さん、故小島正治さん、故平栗稔さん、故小高根美那子さん、故原田愛子さん、故藤原俊雄さん、故遠藤利枝さん、故伊藤和子さん、故森川秀子さん、故近持弘子さん、故須永道子さん、故綱川光子さん、故橋本武義さん、故近藤常子さん、故天野郁子さん、故國吉眞惟さん・蓮子さん、故坪川述子さん、故小峰勝野さん、故伊藤春子さん、故澤谷静枝さん、故安田夢栄子さん、故設楽千恵子さん、故和田和子さん、故後藤富士雄さん、故小林八重子さん、故駒井雅子さん、故高橋良三さん、匿名の方、故佐藤芳子さん、故小池すま子さん、故阿久津弘子さん、匿名の方

みんなの広場



投稿募集

『さあ、言おう』では、皆様のご意見や情報をお待ちしています。掲載記事へのご感想、地域の助け合い活動や居場所の情報、日頃気になっているテーマ、いきがい、社会参加などなど、ぜひお寄せください！

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8
日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

※付属のハガキや投稿用紙もどうぞご利用ください。



便利さを
謳歌している私たち

梶 宏さん

京都府

6月号の「活動の現場から」、新潟県佐渡市の取り組みは、確かに日本の縮図と感じて捉え、拝読しまし

た。太平洋ベルト地帯に住む私も、便利さを謳歌している現状を甘い考えで受け入れていると痛感します。

これからは意識してつながりをつくる必要がある時代、住みやすさも住民参加が大きな指標になりますね。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵に はり絵・池田げんえい



「星
花
火」

編集後記 ●「生き方・自分流」は、大海篤子さん。アクティブに生き、さまざまなことに挑戦し、今は自宅を居場所として開くなど地域でいきいきと活動しています(P4～)。●「活動の現場から」は、長野県で一番小さな町・小布施町で活動1周年を迎えた「えべさの会」。楽しい助け合い活動の様子が伝わってきます(P10～)。●7月16～18日、「思恩忌 夏」を行いました(裏表紙、P36)。●今年度も「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2025」を開催します！ たくさんのご参加をお待ちしています(表紙裏)。

助け合いを
広げよう!



関
芙佐子

地域共生社会が謳われ

政府のお金もつきだした

でも結局、つながりは

人と人との間からしか生まれない

どうしたら、それぞれの優しさをつなげられるのか

堀田さん、笑顔で問い続けるしかないですか



●神奈川大学法学部教授

さわやかを立ち上げた堀田さんのアドバイスを受け研究者に。
日本に高齢者法という法分野を確立しようと模索中で『高齢者法の
理論と実務』（中央経済社、2025年）を出版。学生と一緒に都会の
マンション群でのコミュニティづくりに奮闘しています。

さわやか 8月号

通巻384号 2025年8月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい
編集担当 塩瀬潔泉
取材協力 七七舎
イラスト 福島康子
レイアウト 菊池ゆかり
印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団
〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>
Printed in Japan

無断複写・無断転載はご遠慮ください©



思恩忌夏

さわやか福祉財団の事業運営に
多大なるご貢献をいただきました故人の皆様、
ご遺贈いただきました故人の皆様のご恩に
改めて感謝する場として、
思恩忌 夏を
執り行いました。

(本文36ページをご覧ください)

